

ポスターセッション

学修支援を問う ～何のために、何をどこまでやるべきか～

3/1 (日)

10:00-15:30 (コアタイム 12:00-13:30)

良心館 1F RY104

(掲載は学校名五十音順)

FDに関する情報収集、参加者間の交流を目的として、ポスターセッションが行われました。大学コンソーシアム京都加盟大学の教員、職員、学生が所属大学の特徴的なFDの取り組みを発表しました。

テーマ	外国語教育における反転授業型アクティブ・ラーニングの試み			
学校名	京都外国語大学			
発表代表者	石川保茂			
連名発表者	村上 正行	クレイグ・スミス	ケイト・メイヤ	早瀬 明
	下村 秀則			
キーワード	反転学習		外国語学習	
	アクティブ・ラーニング			
発表の概要	京都外国語大学では、2014年に大学教育再生加速プログラム（AP）に採択され、授業外において学習内容の復習と予習、知識の定着・確認を行い、授業内で学生が他の学生と協働して、プレゼンテーションやディスカッションなどに取り組む反転授業型アクティブ・ラーニングを実践することを目指している。現在、国際教養学科の授業でパイロットの実践を行っており、その結果を報告する。			

外国語教育における反転授業型アクティブ・ラーニングの試み
石川保茂 村上正行 クレイグ・スミス ケイト・メイヤ 早瀬明 下村秀則
京都外国語大学

アクティブ・ラーニング

授業外予習
授業内学習
授業外復習

背景と目的

京都外国語大学は、2014年に大学教育再生加速プログラム（AP）のテーマⅠ（アクティブ・ラーニング）・テーマⅡ（学修成果の可視化）複合型に採択された。

テーマⅠの取組として、授業外において学習内容の復習と予習、知識の定着・確認を行い、授業内で学生が他の学生と協働して、プレゼンテーションやディスカッションなどに取り組む反転授業型アクティブ・ラーニングの実践を目指している。

2014年の春学期に、国際教養学科の授業でパイロットの実践を行っている。

本報告では、その授業モデルと実践、評価について紹介する。

外国語学習における反転学習の概念モデル

授業

授業外学習の振り返り

インプット(input)活動
協働学習

授業外

インプット(input)活動
inkling Habitat上での学習

学習活動

セッション1(1週間)

授業外学習

- 1) 学生は、inkling Habitat上で読んだテキストを理解するためにグループで協同学習を行う
- 2) 教員は必要に応じてLINEでメッセージを送る

授業学習

- 1) 学生は、授業外学習を振り返る
- 2) 教員は、達成度テストを実施し、理解状況を把握する
- 3) 学生はグループで協力してテキストの要約を書き、プレゼンの準備を行なう
- 4) 教員は次の授業外学習について指示をし、調査課題に有用なWebサイトなどの情報を提供する
- 5) 学生は、授業学習を振り返る

セッション2(1週間)

授業外学習

- 1) 学生は、調査課題に取り組み、inkling Habitat上でプレゼンを行う
- 2) 教員は必要に応じてLINEでメッセージを送る

授業学習

- 1) 学生は、授業外学習を振り返る
- 2) 学生は調査課題についてプレゼンし、議論を行なう
- 3) 教員は、学生にメンタやアドバイスをしなう
- 4) 学生は、授業学習を振り返る

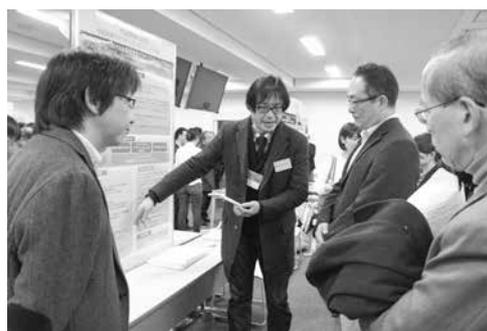
学生による評価

学生5名に4種法でアンケートを実施 (n=76) 平均(50%)

1. 教材の文章は興味深かった。 3,60 (93%)
2. 授業セッション後やその前またはその間読んだ文章を既に読んだ。 3,40 (90%)
3. 文章の理解や他のメンバーとプレゼンの作成に積極的に取り組んだ。 2,80 (64%)
4. 教員からのメッセージを読んだ。 4,00 (90%)
5. 文章の理解やプレゼンの作成において教員からのアドバイスは有用だった。 3,40 (90%)
6. 教員からの指示は、文章の理解やプレゼンの作成を行なう上で有効だった。 4,50 (90%)
7. 達成度テストは文章の理解に有用だった。 3,00 (71%)
8. プレゼン準備が楽だった。 3,80 (90%)
9. 議論は興味深かった。 4,00 (90%)
10. 授業外学習の振り返りは授業学習を行なう上で有用だった。 3,40 (90%)
11. 授業学習の振り返りは、次の授業外学習を行なう上で有用だった。 2,00 (60%)
12. 文章の理解、プレゼンの準備、調査課題に関する議論に積極的に取り組んだ。 3,40 (90%)
13. プレゼン条件による教員の支援は有用だった。 4,40 (90%)
14. 議論する上で教員からの支援は有用だった。 3,60 (90%)

今後の展望

今後、授業実践を積み重ねて、外国語教育における反転授業型アクティブ・ラーニングのモデル構築を目指していく



テーマ	長期インターンシップと海外インターンシップの構築と効果測定		
学校名	京都学園大学		
発表代表者	西片 聡哉		
連名発表者	山本 理恵		
キーワード	京都企業留学		海外企業留学
	教育プログラム		効果測定
発表の概要	<p>京都学園大学では、2013年度より Advanced Internship Program (AIP: 長期インターンシップ) と、 Global Internship Program (GIP: 海外インターンシップ) をスタートさせた(経済・経営・法学部対象)。</p> <p>AIPでは、京都企業での3ヶ月間の実習および事前事後の学習を実施している(上限18単位)。その効果測定のため、2013年度は Pre-Post 形式での定量的測定と、プログラム終了後の面談を実施し、2014年度は PROG を使用したジェネリックスキルの測定を実施した。</p> <p>GIPでは、中国・南通市の協定大学で2ヶ月半の語学学習を実施し、その後に中国企業・中国進出企業で2ヶ月半の企業留学を実施している(上限20単位)。その効果測定のため、2014年度は HSK 検定(中国語検定)を、実習前と実習後に受検した。</p> <p>また、本学の教育目標である「人間力」の測定を、AIP・GIPのそれぞれの学生を対象に2013年度より実施している。</p> <p>本発表では、2つのインターンシップの実施内容と効果測定について報告する。</p>		

長期インターンシップと海外インターンシップの構築と効果測定

AIP (Advanced Internship Program)

学生が自らの可能性を見出すように、本格的な就業体験を通じて企業実務を学ぶ。学生と京都の企業と京都学園大学の三者が共創して取り組む企業留学プログラム。

◆経済・経営・法学部3回生対象
◆上限18単位

◆効果測定

◆PAC分析: AIP
AIPを通じて得たこと・学んだことを精査し、各受講生の共通点を導き出し、「仕事にすること」に対する理解の促進など、学生自身が実感した事柄が抽出された。

「長期インターンシップを満了した学生の成長—PAC分析を中心とした効果測定の試み—」
(2014.5.26 大学教養学)

◆PROG (Pre-Post) : AIP・GIP
「リテラシー」と「コンピテンシー」の2つの観点でジェネリックスキルを測定。

◆事前事後で実施したところ、どちらの学生も数値が上昇した。

◆人間力測定 (Pre-Post) : AIP・GIP
本学の教育目標である「人間力」を測定。特に業務内容に関わる力の向上が確認された。(自己評価と企業様による評価)

◆HSK 検定 : GIP
中国語検定(中国語検定)を受検することで、語学についての効果も測定。

→ A・K・Aの割合:
(事前) 1級合格(簡単な単語)
(事後) 4級合格(広範囲の単語)

GIP (Global Internship Program)

学生が在学中に海外企業・海外進出日系企業に企業留学し、グローバル化した経済を体験しながらビジネスの最新動向を学ぶための教育プログラム。

◆経済・経営・法学部3回生対象
◆上限20単位

短期 海外インターンシップ

◆こんなプログラムもあります!
GIPとは別に、夏休みが1ヵ月間を利用し、海外企業・海外進出日系企業に企業留学するプログラム。

◆全学部対象 ◆上限4単位



テーマ	初年次キャリア科目の構築と効果測定		
学校名	京都学園大学		
発表代表者	三保 紀裕		
連名発表者	上田 さやか		
キーワード	全学共通キャリア科目		汎用的能力の醸成
	グループワーク		効果測定
発表の概要	<p>京都学園大学では、2013 年度より 1 回生対象の全学共通キャリア科目「キャリアデザイン A・B」を開講している。Aは春学期の必修科目であり、「大学生活を前向きに捉え、他者と円滑な関係を築く基礎を身につける」ことを狙いとしている。Bは秋学期の登録必要科目であり、「協働する力を身につけ、自己理解・社会理解を促進させ、目標を持って大学生活をデザインできる」ことを狙いとしている。</p> <p>授業は「コミュニケーション」や「チームワーク」に関する内容が主軸の構成で、1 クラス 40～50 名程度のグループワーク中心の内容となっている。複数の担当教員で同一内容のプログラムを行い、毎週の授業終了時に振り返りミーティングを実施している。</p> <p>また、授業の効果を測定するため、「コミュニケーション」等に関する Pre-Post 形式の測定と、本学の教育目標である「人間力」の測定を実施している。</p> <p>本発表では、科目の構築・運営と効果測定について報告する。</p>		

初年次キャリア科目の構築と効果測定

2015.3 | 第20回FOT4+5

全学共通のキャリア教育プログラム

- 2014年度一学共通のキャリア教育を刷新
- 「理論と実践の融合」を掲げるキャリアプログラム構築
- 体系的・段階的に設定されたキャリア教育科目
- 本学の教育目標（人間力の醸成）を踏襲

1回生対象 キャリアデザインA・B

A：春学期（必修）
B：秋学期（登録必要）

○授業概要○

- ※1クラス40～50人程度
- ※同一内容を複数教員で担当
- ※アクティブラーニング形式

○授業後の振り返り○

- ※毎週、授業後実施
- ※出席状況・受講態度等を報告
- ※授業内の工夫を共有
- ※教材の修正（必要に応じて随時）

○本科目の目的○

- ※キャリアデザインA
大学生活を前向きに捉え、主体的に学ぶ姿勢を身につける
- ※キャリアデザインB
大学生活を主体的に過ごすために必要な知識・技能・態度を身につけ、目標を持って大学生活をデザインすることができるようになる

効果測定

◆授業に関するアンケート（Pre-Post）
「コミュニケーション」「チームワーク」「学びへの関与」について、Aの第1回と第15回にアンケート調査を実施。（Pre-Post 27人の参加者 449名）

結果①

- 探索的因子分析
 - ・コミュニケーションの尺度に適用
 - ・「聞く」「伝える」の2因子が抽出
- 潜在変数モデル（LDS: McAndrew, 2004）
 - ・変化の特徴を探る
 - ・各測定変数に対して適用（Amos 21）
- モデルから得られた結果
 - ・「学びへの関与」は変化なし
 - ・「チームワーク」も変化なし
 - ・「聞く」「伝える」で有意な増進の上昇

結果②

- 多群同時分析の適用
 - ・「聞く」「伝える」のLDSモデルに適用
 - ・本科目の成績は授業への真摯な取組に比例
- 成績別の多群同時分析
 - ・「改善良好」別の多群同時分析
 - ・成績により得点の上昇に違いが見られた

【発表者】伊藤 昌典（京都府立大学）・三保 紀裕（京都学園大学）
2014.11.28 | セブスタシオン 京大・京大府大 京大府大 京大府大



テーマ	公開授業を中心とする授業改革への取り組み － 京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センターの事例紹介－		
学校名	京都華頂大学・華頂短期大学		
発表代表者	浅田 瞳		
連名発表者	堀出 雅人		
キーワード	公開授業		授業改善
	全学的教育改革		学修成果
発表の概要	<p>■平成 24 年「大学教育改革地域フォーラム」の本校開催を契機に、学長のリーダーシップの下、全学を挙げ教育改革に取り組む「教育改革会議」を設置した。</p> <p>■本学の「教育開発センター」は、教育改革会議との連携のもと、教員 FD や教育方法の改善を推進する機関として中心的に取り組んでいる。</p> <p>■平成 25 年度事業として公開授業を実施し、学生の主体的な学びを促進するため、学科を横断して講義・実習形式の教育方法の交流および研究をめざした。</p> <p>■参加者アンケートからは、「期間が短く、多くの教員参加を得られない」「公開授業の科目が少ない」との意見が出て、課題の分析に至らなかった。</p> <p>■本年度公開授業については①期間を 1 週間に延長し、月～金曜まで毎日 1～3 つの授業公開 ②非常勤講師にも呼びかけ全学科で 12 月に実施する。</p> <p>■今回、より多くの参加者アンケートを分析し、学修成果を高める教育方法を明らかにしていくものとする。</p>		

公開授業を中心とする授業改革への取り組み
－ 京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センターの事例紹介－
浅田 瞳（センター主宰） 堀出 雅人（研究員）

0. センターの概要
京都華頂大学・華頂短期大学教育開発センター（以下センターと略）は文部科学省「大学教育改革地域フォーラム」の本学での開催（2012年）を契機に、学長のリーダーシップの下、全学を挙げ教育改革に取り組む「教育改革会議」と連携し、教員FDや教育方法の改善を推進する機関として研究員6名が中心となり事業を進めている。

1. センターの活動

公開授業の企画・運営	授業評価アンケートの分析	学内研究会
ニュースレター	FD 先進大学訪問	研究開発報告書

2. 公開授業の実施と成果（2013-2014年度）

2.1 2013年度の取り組み
2013年度においては、センター所属教員の授業実践を支援し、教育方法の向上と改善に向けて、多角的に分析、意見交換を行い、教員の授業力向上を全体の授業力向上を促したものであった。

内訳

- ・2013年度春学期（7月8～12日）・秋学期（10月3～22日）（写真①）
- ・2科目を公開（大学2科目、短大5科目、講義形式や演習形式、受講者数も少人数から多人数など様々）

留意

- ・参加する教員の多くは自分の所属する学科の教員の授業しか準備せず、他学科の教員の授業を準備していない。
- ・前期と後期に分けて公開授業を実施したが、通常の授業と同時に行ったため教員の参加者が少ない。
- ・非常勤講師への案内が徹底できていない。

写真① 公開授業の様子

2.2 2014年度の取り組み
上記の結果を踏まえ、今年度は専任教員を増やし、今後の授業に生かすために以下の工夫を行った。

内訳

- ・2014年度秋学期に実施（12月1週目を公開授業weekに設定）
- ・非常勤講師の担当科目を含む10科目を公開（大学4科目、短大6科目）
- ・参加した教員の振り返りシートをもとに「公開授業に関する意見交換会」を実施（写真②）

留意

- ・意見交換会を通して授業改善に向けた教員間の協力の共有、アイデアの創出
- ・センター所属研究員以外の公開授業の実施拡大に向けた協力教員の獲得

3. 今後の課題
公開授業そのものはあくまで授業改善の手段のひとつにすぎないが、本規模の大学に置いて教育改革は本学組織にたいしては中であると考えられ、本学においても、全教員に教育方法の改善が意識されているとはいえないが、今後もセンターが中心となり、全教員を巻き込んだ取り組みが必要となるだろう。

写真② 公開授業実施後の振り返り



テーマ	京都光華女子大学における学習・学修マネジメント力向上の組織的支援体制			
学校名	京都光華女子大学			
発表代表者	阿部 一晴			
連名発表者	酒井 浩二	乾 明紀	真東 徳博	宇野 哲司
	塩崎 正司			
キーワード	アクティブラーニング		学習・学修マネジメント	
	アセスメント		教職協働	
発表の概要	<p>京都光華女子大学が、平成26年度文部科学省「大学教育再生加速プログラム」(AP)に採択を受けたアクティブラーニングの取り組み概要について紹介する。この取り組みは、アクティブラーニングを「知識やスキルの習得に向けて資源を自律的に有効活用する学びの態度」と定義し、それを実現できる「学習・学修マネジメント力」を備えた学生をアクティブラーナーとして育成することを目的としたものである。具体的には、(1)全学共通科目におけるアクティブラーニング化推進を中心とした授業改革(授業形態のアクティブラーニング化)(2)学習ステーションや学科コモンズと連携した授業外学習改革(3)セルフチェックシート、ルーブリック等による学修成果の可視化(4)指標(光華アクティブラーニングアセスメント)によるアクティブラーニング態度の把握の4つの領域に取り組み、その仕組みや支援体制を、全学で組織的に構築するものである。</p>			

KOKA's HEART
未来を開き、おもしろい心

京都光華女子大学における
学習・学修マネジメント力向上の組織的支援体制

京都光華女子大学・キャリア形成学部

概要
京都光華女子大学が、平成26年度文部科学省「大学教育再生加速プログラム」(AP)に採択を受けたアクティブラーニングの取り組み概要について紹介する。
この取り組みは、アクティブラーニングを「知識やスキルの習得に向けて資源を自律的に有効活用する学びの態度」と定義し、それを実現できる「学習・学修マネジメント力」を備えた学生をアクティブラーナーとして育成することを目的としたものである。

背景(大学の現状)
自己学習が定着した学生が全体の3分の2(まったくしない20%、週5時間未満44%)
中堅層以下の学生の、学習意欲の低下、「学び」の重要性に対する認知不足が大きな課題

取り組みの目的
-アクティブな活動を促す授業形態に改善することで、学生の学習・学修態度を高める
-授業形態のアクティブラーニング化を通じて、学生を自律的な学習・学修態度を持つアクティブラーナーに実装させる

授業形態・学生の学習態度のAL水準とその向上の指針

具体的な取り組み
上記目的を達成するために、授業内・授業外での多様な取り組みが実施されています。以下4つの領域に分けて実行する

4つの領域と支援体制

領域A: 授業改革(授業形態のAL化)
全学共通科目における本学ALの推進
①学習意欲の課題化の徹底
②学生自身が学ぶことと学びを公表する学びの徹底

領域B: 授業外学習改革
多様な学習ニーズに応える環境整備、単位スタックによる個別学習サポート体制
■ 学習ステーション ■ 学科コモンズ ■ 教職協働センター ■ 職業館

領域C: 学修成果の可視化
システムにより情報を登録・可視化し、学生・教員が双方向に活用できるシステムを構築
①セルフチェックシート
②授業・授業外の学習・修習等を学生が記録、自己評価
③ルーブリック
授業の目標と評価基準、各自の達成度を可視化

領域D: 指標によるAL態度の把握(意識ではなく行動に主眼)
(光華アクティブラーニングアセスメント)の開発と活用
(2016-17年度実施、2018-20年度予定・評価・改善)

4つの領域と支援体制
①教員主導AL
②教員と協働AL
③学生自身AL
④他者支援AL

まとめ
性別の異なる学部ごとの異質性(DP)実現に向けた共通の仕組みの構築・教職員員の意識改革
キャリア形成学部、マネジメント力の取得
健康科学部 実証試験合格の実績とスクアの専門的
能力の発揮

学習・学修力向上と全学員の学生の異質性(DP)の
学習・学修させられないことを根本的教員の数値にしない
大学全体としての 組織的な体制へ



テーマ	「京都光華のエンロールメント」の新たな展開： 学修成果の可視化とアクティブラーナーの育成のための全学的な学修支援体制の整備			
学校名	京都光華女子大学			
発表代表者	橋本智也			
連名発表者	宇野 哲司	土佐 嘉宏	阿部 一晴	相場 浩和
	水野 豊			
キーワード	学修成果の可視化		アクティブラーニング	
	I R		教学マネジメント	
発表の概要	<p>京都光華女子大学と京都光華女子大学短期大学部では、入学前から卒業後までをデータに基づいて総合的に支援する「京都光華のエンロールメント」を進めており、その一環として、学修成果（教育目標の達成度）の可視化とアクティブラーナー育成のための学修支援体制の整備に取り組んでいる。また、この度、京都光華女子大学と京都光華女子大学短期大学部は、ともに平成 26 年度「大学教育再生加速プログラム（A P）」に採択された。それにより「京都光華のエンロールメント」は E M・I R の学内への普及・確立（第 1 期）、恒常的な専門組織の立ち上げ（第 2 期）を経て、学修成果の可視化などによる E M・I R の実質化（第 3 期）という新たな展開を迎えている。本発表では、A P の取り組みを「京都光華のエンロールメント」の中に位置付け、全学的かつ組織横断的に展開させることを、どのように学生の成長につなげていくかについて議論する。</p>			

「京都光華のエンロールメント」の新たな展開
学修成果の可視化とアクティブラーナーの育成のための
全学的な学修支援体制の整備

京都光華女子大学 / E M・I R 部

京都光華女子大学では、入学前から卒業後までをデータに基づいて総合的に支援する「京都光華のエンロールメント（EM）」と「IR」を進めており、その一環として、学修支援体制の整備と学修成果の可視化に取り組んでいる。この度、それらの取り組みが「大学教育再生加速プログラム（AP）」として大規模に採択された。本発表では、AP をどのように教育改善と学生の成長につなげようとしているのかについて報告する。

Institutional Research (I R) **大学教育再生加速プログラム (A P)**

考え方
大学に対する学生の満足度を向上させることが目的。学内の取り組みを個々に切り離して考えるのではなく、学科・部署を横断して効果的・効率的に学生を支援する。取り組みを進めるにあたり、データに基づいて企画・検証を行う。校訓「真実心」（思いやりの心）を形にする。

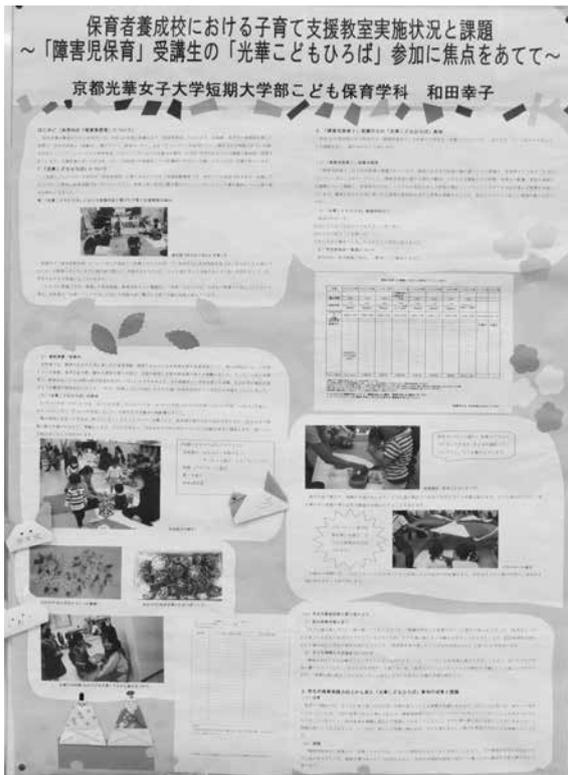
これまでの経緯、現状

- 2008年「学生支援 G P」
- 学生データを集中管理するシステムを導入
- 2012年「E M・I R 部」
- 恒常的な組織として発足
- 学長が統括、副学長が部長、教職員が部員
- 2014年「大学教育再生加速プログラム」
- 大規模に採択、E M・I R のさらなる実質化

具体的な取り組み例
体系的な科目提供、質を伴った学修時間の増加・確保に向けて、【教員が想定する授業外学修時間】と【学生の実際の学修時間】を比較分析。



テーマ	保育者養成校における子育て支援教室実施状況と課題 ～「障害児保育」受講学生の「光華こどもひろば」参加に焦点をあてて～		
学校名	京都光華女子大学短期大学部		
発表代表者	和田 幸子		
連名発表者			
キーワード	光華こどもひろば		「障害児保育」受講学生
	保育実習室		保育者養成校
発表の概要	<p>本学内保育実習室では、近隣の未就園親子が自由に遊べる「光華こどもひろば」を月2回開いている。スタッフは教員、非常勤アルバイトの他、学生のボランティアである。学生の自主的な参加は望ましいのであるが、学生に参加経験の意図を明確に伝えることが困難でもあった。そこで平成26年度後期は「障害児保育」受講学生に、一人ひとりのこどもの活動に添うこと、10分間の設定保育を担当すること、それらを記録に記すことを目標として参加させた。この試みの経過と課題を報告する。</p>		



テーマ	京都産業大学における学生主体による障がい学生支援の意義と課題 —平成26年度全学FD/SD研修会を実施して—		
学校名	京都産業大学		
発表代表者	雨宮 ゆり		
連名発表者	北野 美樹	佐藤 一樹	
キーワード	障がい学生支援		ユニバーサルデザイン
	合理的配慮		学生主体によるFD/SD
発表の概要	<p>各大学で障がい学生支援の充実を目指す動きが見られる中、京都産業大学でも、障がい学生支援に対する教職員の理解を促す等の啓発を進めてきた。現在では、「合理的配慮」をどのように定めるかに議論の焦点が移行しており、教職員への協力依頼や個々の障害の特性に関する認識の普及といった課題に取り組んでいる。</p> <p>本発表では、「障がい学生支援推進団体あすか」と「学生FDスタッフAC燦」の企画によって開催された、2014年5月の第2回全学FD/SD研修会（ユニバーサルデザイン講義とは）、同年12月の第3回全学FD/SD研修会（発達障害の理解および学内における支援について）の概要を紹介する。また、両研修会のグループディスカッションで作成された模造紙および参加者から回収したアンケート結果の分析を踏まえ、学生主体による障がい学生支援が本学にもたらした意義と今後の課題について考察する。</p>		

京都産業大学における学生主体による障がい学生支援の意義と課題
～平成26年度全学FD/SD研修会を実施して～
雨宮 ゆり(学長室 教育支援研究開発担当)・北野 美樹(法学部4年次)・佐藤 一樹(経済学部3年次)

障がい学生支援をめぐる、平成26年4月「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」の施行が決まるなど、「合理的配慮」について議論が盛みになっている。京都産業大学では、大学全体で障がい学生支援の理解・啓発を促す等、支援の充実に向けた動きが数多く見られている。平成26年度は、本学の学生主体による障がい学生支援推進団体あすかと学生FDスタッフAC燦による、ユニバーサルデザイン講義と発達障害の理解および学内における支援について考える全学FD/SD研修会を計2回実施した。本発表では、両研修会の概要、グループディスカッションで作成された模造紙および参加者から回収したアンケート結果の分析を踏まえ、学生主体による障がい学生支援が本学にもたらした意義と今後の課題について考察する。

学生FDスタッフAC燦は、学生・教員・職員が一体となり、障がい学生支援推進団体あすかと連携し、障がい学生支援の充実を図ることを目指している。また、京都産業大学では、大学全体で障がい学生支援の理解・啓発を促す等、支援の充実に向けた動きが数多く見られている。平成26年度は、本学の学生主体による障がい学生支援推進団体あすかと学生FDスタッフAC燦による、ユニバーサルデザイン講義と発達障害の理解および学内における支援について考える全学FD/SD研修会を計2回実施した。本発表では、両研修会の概要、グループディスカッションで作成された模造紙および参加者から回収したアンケート結果の分析を踏まえ、学生主体による障がい学生支援が本学にもたらした意義と今後の課題について考察する。

第2回全学FD/SD研修会
ユニバーサルデザイン講義とは

【開催】
・日時：平成26年5月28日(水) 13:15～17:00
・場所：京都産業大学 ラウンジ2号棟
・参加：教員22名、職員30名、学生23名 計83名

【目的】
①障がい学生及び障がい学生支援の現状を知ってもらう。
②障がい学生の視点から、実際の課題を把握してもらう。
③合理的配慮のあり方についてイメージを持ってもらう。
④ユニバーサルデザイン講義について考えを深めてもらう。

【主なプログラム】
①ショートムービー
②3名の教員による模造紙発表(聴覚・視覚・発達・聴覚)

【参加者の声からわかる本研修会の成果】
①「合理的配慮」について、具体的な事例を知ることができた。
②「合理的配慮」について、具体的な事例を知ることができた。
③「合理的配慮」について、具体的な事例を知ることができた。

【今後の課題】
①「合理的配慮」について、具体的な事例を知ることができた。
②「合理的配慮」について、具体的な事例を知ることができた。
③「合理的配慮」について、具体的な事例を知ることができた。

第3回全学FD/SD研修会
発達障害の理解および学内における支援について

【開催】
・日時：平成26年12月3日(水) 12:45～16:00
・場所：京都産業大学 ラウンジ2号棟
・参加：教員20名、職員25名、学生16名 計61名

【目的】
①発達障害の理解および学内における支援について考える。
②本学における発達障害の学生支援の充実を目指す。

【主なプログラム】
①発達障害の理解
②発達障害の学生支援について考える。
③学生・教員・職員が一体となり、障がい学生支援の充実を図ることを目指している。

【参加者の声からわかる本研修会の成果】
①「合理的配慮」について、具体的な事例を知ることができた。
②「合理的配慮」について、具体的な事例を知ることができた。
③「合理的配慮」について、具体的な事例を知ることができた。

【今後の課題】
①「合理的配慮」について、具体的な事例を知ることができた。
②「合理的配慮」について、具体的な事例を知ることができた。
③「合理的配慮」について、具体的な事例を知ることができた。

【学生主体による障がい学生支援の意義と今後の課題】
2回の研修会を通して、本学の障がい学生及び障がい学生支援の現状について、障がい学生自らの視点から伝えられた意義は大きい。両研修会では、また「合理的配慮」推進推進を促した。今後、他の障がい学生支援についても理解を促していきたい。
また、第2回全学FD/SD研修会では、学生・教員・職員で合同の模造紙発表を行いました。これにより、障がい学生支援に対して「自分ではどうもできない」という考えがなくなり、全員が当事者意識をもって、お互いに学び合いながら取り組んでいくことができた。今後、学生FDスタッフAC燦は、全学FD/SD研修会やイベント等の実施を通して、学生が日々の学生生活で感じることを大学に発信する役割を果たしていけると考えている。

Keep Innovating.
50 京都産業大学 KYOTO SANJO UNIVERSITY
2015年、創立50周年



テーマ	雄飛館ラーニングコモンズにおける学習支援/教育支援 ～多様な学習スペースを活用した学びの実践事例報告～		
学校名	京都産業大学		
発表代表者	千葉 美保子		
連名発表者	松井 きょう子		
キーワード	ラーニングコモンズ		教育支援
	アクティブラーニング		学習支援
発表の概要	<p>2014年4月にオープンした京都産業大学 雄飛館ラーニングコモンズは、学生の正課外学習の空間として機能しつつも、学内における新たなアクティブラーニング型授業・イベントの実践の場としても展開している。2013年10月からの仮オープン時期を含め、スペースの利用申込み件数は全体で約800件にのぼる（2014年12月現在）。また、ラーニングコモンズを効果的に活用してもらうべく、人的サービスを展開している。特に、3階に設置されている学習支援カウンターでは、学生への直接的な学習支援だけでなく、学生・教職員によるアクティブラーニング型授業・イベントへのアドバイジングを通じ、本学のFD/SDの一端を担っている。</p> <p>本報告ではラーニングコモンズの活用事例を通じた学習支援・教育支援の実践事例を紹介する。学習支援カウンターが提供した学生・教職員への支援、そしてラーニングコモンズを起点とした学内におけるアクティブラーニングの展開について考察する。</p>		

雄飛館ラーニングコモンズにおける学習支援/教育支援
～多様な学習スペースを活用した学びの実践事例報告～
千葉美保子・松井きょう子(京都産業大学 学長室)

京都産業大学では、「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」の一環として、2014年4月に雄飛館ラーニングコモンズをオープンさせた。ラーニングコモンズでは、特に学び、共に創る「移動空間」をキーワードに学生の主体的な学びやアクティブラーニング型授業・イベントを学ぶ学習環境の提供、および多様な学びを行っている。

雄飛館ラーニングコモンズ 主体的な学びの空間と人的サービス提供

- 用途・人数に応じた多様な学習スペース
 - 学生スタッフと専門スタッフによる人的支援
 - エントランスカウンター
 - ICTカウンター
 - 学習支援カウンター
- 学習支援カウンター (2015年2月現在)
 - 学習支援スタッフ 3名 (専門職員: 日本語/英語/英語、ICT支援)
 - 対応時間 月曜日～金曜日 9時～18時
 - 1) 学習支援、印刷、グループに対するオンライン、プレゼンテーション支援
 - 2) 教材支援、ラーニングコモンズを活用したアクティブラーニング型授業、イベントのアドバイス、授業支援
 - 3) ICT支援、用途とLearningSpaceへのサポート、ICT機器に関する支援

授業による活用実績

- 学習支援カウンターによる教職員へのアドバイジング
- 授業・イベント実践事例
- 学習支援カウンターによる教職員へのアドバイジング
- 授業・イベント実践事例

教職員からのフィードバック (一部抜粋)

「雄飛館ラーニングコモンズは、学生にとって非常に重要な学習空間であり、特にICT支援や印刷サービスが授業に大きく貢献している。また、学習支援カウンターでの人的サービスも、授業の進捗を助けていると感じている。」

今後の展開

- 授業支援
- 学内向けアクティブラーニングセミナーの実施
- 学習支援カウンター業務の効率化
- 学習支援スタッフの育成・研修

Keep Innovating. 京都産業大学 2015年、創立50周年



テーマ	英語教育に関する高大連携 FD の試み			
学校名	京都産業大学			
発表代表者	中沢 正江			
連名発表者	矢野 博	大坂 仁	松井 きょう子	森 洋
キーワード	高大接続		リメディアル教育	
	連携 FD		グローバル人材育成	
発表の概要	<p>本学では、附属高校と大学で、「高大連携授業」を附属高校生に対し、本学教員が行う等の取組をこれまで行ってきた。今回は、更に、高校の教員と大学の教員が、共に高校から大学への英語教育に関する接続について議論する、同じテーブルで教育を語る、という一歩踏み込んだ取り組みを行った。より具体的には、本学附属高校の英語科目担当教員4名が、本学の基礎英語、TOEIC初級、といった1年次生向けの英語科目を見学し、その後、高校教員、本学の入学センター長、見学を受け入れた教員等で付箋と模造紙を使い、「見学して感じたこと」「高校と大学が連携してできること」についてブレインストーミングを行った。</p> <p>本報告では、企画概要と得られたデータ、実際に参加者としてその場で感じた本取り組みの意義を解説する。</p>			

英語教育に関する高大連携FD

中沢正江・矢野博・大坂仁・足立薫・松井きょう子・森洋

概要

日時 平成26年12月6日(火) 9:40~13:15

場所 京都産業大学(12号館) 12523教室

プログラム

(A)アイスブレイク
【私生活雑談・楽フェーズで暖めます！】
フットリコーダ(学芸部)

(B)本学の英語プログラム全体像と本日見学授業の概要
解説：大川博(中野学長・学芸部副部長)

(C)3人がグループで共有ワーク
「この発表会、こんなことが起こるといいな!」
【暖かくなった!こんな発表!】
フットリコーダ(中野学長)

(D)基礎英語(総合)1授業
11号館11205L13教室

(E)初級英語(TOEIC)1授業
3号館304教室

(F)見学授業の担当教員を交えて
5~6人がグループで模造紙ワーク
フットリコーダ(足立薫(国際文化学部)
中野学長)

1)アイスブレイク自己紹介

2)ブレインストーミング
基礎・初級から初級上まで7年生の英語力を伸ばすための

授業担当者としてまず自己紹介(大川博)
担当教員は「楽しかった!こんな発表!」
「早かった!こんな発表!」

3)まとめワーク
教育現場の悩みごとを振り返り
良いところを伸ばすために
【私達(大学・高校)ができること】

対象
英語科目担当教員(4名)
入学PTメンバー(7名)
見学授業の担当教員(2名)

主催
大学のグローバルプロジェクトチーム(入学PT)

グローバル人材育成推進事業 プロジェクト体制

入学PTの構成
入学センター長(PTリーダー)・入学センター事務長(PTリーダー)
教育センター副部長(PTメンバー)・教育支援センター副部長(PTメンバー)
学芸部(教育支援センター副部長)・国際文化学部(PTメンバー)

入学PTの特長
入学PTの構成から本学の教育改善について検討するプロジェクトチーム
高大連携FDの趣、1校1分野別の構築などの提案

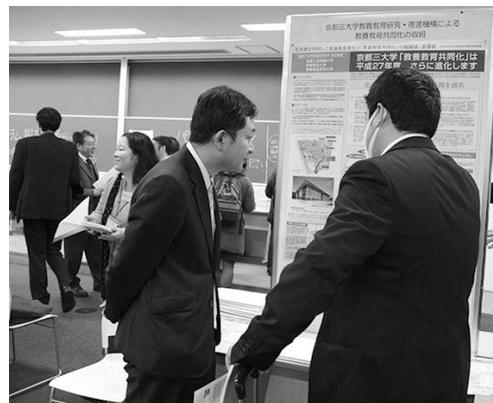
まとめ

- 見学授業で気づいたこと
- 高校側
 - 1)1つの授業授業:学生のアイディアを形に出来る授業は必要である。
 - 2)1つの見学授業:卒業後よく活用して貰う授業は必ず必要である。授業中に出来る授業、卒業後よく活用して貰う授業は必ず必要である。
- 今後の高大連携の可能性
- 高校側
 - 1)高大連携と1校1分野別の構築から卒業後よく活用して貰う授業は必要である。
 - 2)1つの授業授業:学生のアイディアを形に出来る授業は必要である。
 - 3)1つの見学授業:卒業後よく活用して貰う授業は必ず必要である。
- 大学側
 - 1)高大連携と1校1分野別の構築から卒業後よく活用して貰う授業は必要である。
 - 2)1つの授業授業:学生のアイディアを形に出来る授業は必要である。
 - 3)1つの見学授業:卒業後よく活用して貰う授業は必ず必要である。

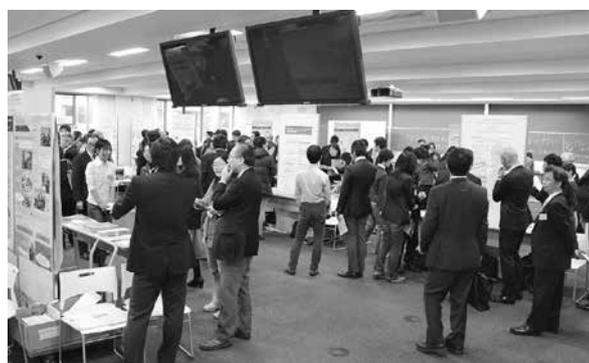
444

セブスタジョン

テーマ	京都三大学教養教育研究・推進機構による教養教育共同化の取組		
学校名	京都三大学教養教育研究・推進機構		
発表代表者	児玉 英明		
連名発表者	森本 幸治	片山 和彦	
キーワード	教養教育		大学間連携
	京都学		リベラルアーツ・ゼミナール
	教養教育共同化施設		
発表の概要	<p>京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学の三大学は、平成26年度より、教養教育共同化の取組を開始した。従来から単位互換制度を通じて、三大学の交流はあったが、平成26年度からは一歩踏み込んで、教養教育共同化の取組を進めることにより、他大学が提供している共同化科目もすべて自大学の科目として単位認定を受けることが可能になった。</p> <p>また、従来は三大学それぞれのキャンパスで共同化科目を開講していたが、平成26年度後期より、京都北山地区に教養教育共同化施設（稲盛記念会館）を整備し、三大学の学生が教養教育共同化科目を1カ所で受講できる環境が整った。カリキュラムにも三大学がそれぞれの強みを活かすことで、新たな展開が生まれている。例えば、近代京都の歩みと三大学の貢献をテーマにした「京都学事始～近代京都と三大学～」や三大学の学生が共に学ぶ少人数制の「リベラルアーツ・ゼミナール」など、新たな試みも始まっている。</p>		



テーマ	地域密着型「共創」モデルの実践		
学校名	京都聖母女学院短期大学		
発表代表者	山成 昭世		
連名発表者	荒牧 裕一	渡邊 慶一	黒田 健二
キーワード	地域協働		全学の取り組み
	生活・教育・保育		
発表の概要	<p>京都聖母女学院短期大学では全学で授業、実習を通して地域に密着した取り組みを行っている。</p> <p>生活科学科・食物栄養専攻は 今年度、京都市中央卸売市場第一市場と包括協定を結び、地域の活性化と食情報・食育を推進している。その一環として12月24日に「クリスマス子どもお料理教室」を開催した。</p> <p>生活科学科・キャリアデザイン専攻は2014年、最寄り駅に建設中の大型マンションを中心とする「藤森駅前まちづくりプロジェクト」に参画し、学生が作成した住戸間取りをメニュープランとして提案した。今後も各種イベントを実施していく。</p> <p>児童教育学科は、学生の持ちうる力を地域へ還元すると同時に、地域の力をお借りして次世代を担う保育者・教員を育む地域密着型プログラムとして「聖母こどもフェスティバル」を実施している。従来より実施していた「卒業作品展」に世代間交流事業をアレンジし、2008年より始まった。今や短大の拠点である伏見区深草エリアの枠を超えて参加者が増大する広がりを見せている。</p> <p>これらの取り組みは学生が地域と密着したフィールドワークや研究活動を重視し、学生が主体となり企画・推進・実践している。教育・保育・生活の場の課題を見つけ、解決するために地域と「共創」した事例を報告する。</p>		



テーマ	教員相互授業参観および英語による卒論発表会の実施について			
学校名	京都薬科大学			
発表代表者	後藤 直正			
連名発表者	秋葉 聡	高野 江里	佐原 和美	近藤 利彦
キーワード				
発表の概要	<p>本学で実施している教育改善のためのFDのなかから、2件のトピックスについて示したい。1件目は、より良い授業展開のために実施している「教員相互授業参観」である。これは教員の自由意志を促して実施しているもので、授業法や科目間の整合性などの改善を目的としたものである。2件目は、英語による卒業論文発表会である。本学は1学年の学生数も多く、口頭発表を実施することはできず、英語で作製したポスターでの発表を行っている。</p> <p>2件の実施は本学での教育に明らかな変化をもたらしている。これらの実施概要や実施のために工夫したこと、また、これらによって起こった変化やなどを含めて議論の材料を供したい。</p>			



教員相互授業参観 および 英語による卒論発表会の実施について

京都薬科大学 教務部 秋葉 聡、高野 江里、佐原 和美、近藤 利彦、後藤 直正

教員相互授業参観

① 授業改善は学生による授業評価アンケート等を参考に教員が個々に実施するが、自身の経験のみでは指導的な変り学習効果の向上に繋がらない場合がある。

② 複数の教員で担当するオムニバス形式の講義科目や、階次性のある関連講義科目において、各講義内容の積み分け、重要性、順次性の確認は、教員間の事前協議やシラバスのみでは不十分である。

これら問題点の解決策として、

- ① 授業参観者および授業担当者の双方の授業改善に立てる目的で
- ② 関連科目の授業内容を相互に把握し、より良いカリキュラムの構築に活かす目的で

「教員間の授業参観」を導入した。

- ① 2013年度後期のトライアルを経て、2014年度の前期・後期に本格的に実施した。
- ② 参観する科目の担当者に事前に了承を得る。
- ③ 担当者から参観を依頼する。

参観回数・対象を強制せずに参観者の自由とした。

④ 報告書には参観者に参考になった点に加え、担当者の改善点も記入するようにした。

⑤ 参観者と担当者間での情報交換や、参観報告書の担当者へのフィードバックを受けた。

参観した件数（延数） 参観を受けた件数（延数）
178科目 **107科目**
 前期120科目・後期58科目 前期66科目・後期41科目
 在職専任教員数：96名

- ① 参観者およびフィードバックを受けた担当者にとって、他者の講義手法や指導からの指図が参考になり、また、学生目線での授業内容や授業進捗が把握でき、授業の仕方や進め方を考え直す良い機会となった。
- ② 若手教員の講義力の進歩に繋がった。
- ③ 科目内・科目間の関連性の確認に加えて、順次性があるカリキュラムの重要性を認識するようになった。

【今後の展開】

- ① 教員相互授業参観の参加者数や在り方を改善する目的で本取組に関するアンケートを実施する。
- ② 科目や個々の講義内容の位置づけや到達目標の見直しに活用する。

英語による卒論発表会

本学ではグローバル人材育成に関する種々の外国語教育プログラムを設定している。しかし、薬学領域の英語教育としては講義形式の授業と研究室での英文原簿論文の読解が主であった。英語は言葉であることから、薬学英語を言葉として活用する機会を設けることが「ファースト・サイエティスト」を目指した薬学英語教育を推進する場となると考えた。

この点への対応策として、研究成果を英語で口頭発表する機会があれば、その準備のために

- ① 研究成果の英語での慣習に慣れから慣れおくこと
- ② 薬学英語を活用した英作文やプレゼンテーションの能力が向上することが期待できることから

「英語による卒論発表会」を導入した。

2013年度 6月
2014年度

- ① 成果はポスター形式で英語で表記
- ② 90分間のポスター展示中、参観者に対して目的、方法、結果を英語で3分間程度の口頭で説明
- ③ 簡単な質疑応答を英語で（専門的な討論は日本語可）

④ 英語での討論の活性化のために、国際学術交流協定締結校の教員と学生を招待した。外国人専攻にも専攻領域や専攻分野に応じたゼミナール（ゼミナール）

⑤ 学生の自発的な学習意欲の向上を期待して、海外招待者が選んだ「会話に積極的な学生」を招待者との懇話会「The Get-Together Party」へ招待し、会話の機会を創出した。

この卒論発表会(6月)の後に実施した英語力に関するアンケート(10月)では、研究室で分属されたばかりの3年次生において、今後は英語での発表力を伸ばしたいと考える学生が多かった。

【今後の展開】

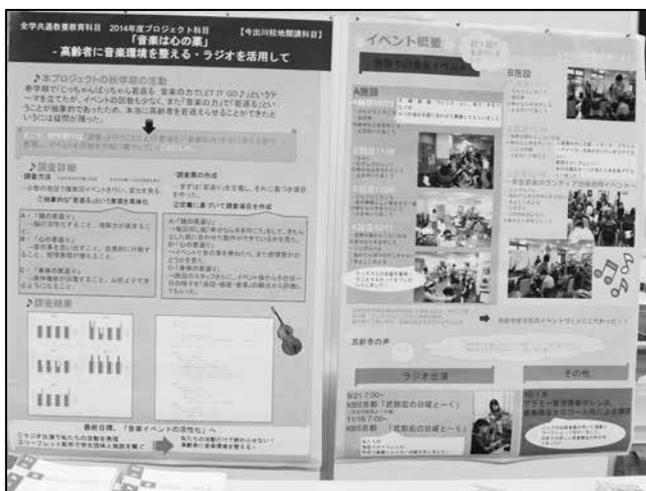
- ① 国際学会での発表を目指す学生が増えることを期待する。
- ② 医療現場で外国人と積極的にコミュニケーションを取るような学生の育成に繋がる。

導入経緯・問題点 目的・対応策 実施概要 工夫した点 実施状況・もたらした変化

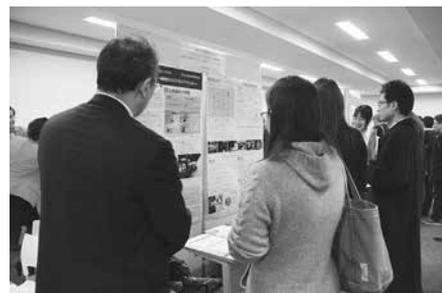
447

セブ
ス
シ
ョ
ン

テーマ	全学共通教養教育科目「プロジェクト科目」成果報告 【「音楽は心の薬」-高齢者に音楽環境を整える・ラジオを活用して-】		
学校名	同志社大学		
発表代表者	平田 有喜宏		
連名発表者	関 萌	朝永 晶子	中井 芳野
キーワード	Project-Based Learning		社会連携
	教養教育科目		多様な指導・支援体制
発表の概要	<p>同志社大学では、2006年度より全学共通教養教育科目「プロジェクト科目」を設置している。本科目は全学部全学年対象のPBLに基づく正課科目として年間20クラス250名程度が履修している。</p> <p>今回は2014年度開講クラスのうち最終成果報告会で総合評価の高かった【「音楽は心の薬」-高齢者に音楽環境を整える・ラジオを活用して-】について履修生が報告する。</p> <p>本プロジェクトの目的は、高齢者福祉施設にて音楽環境を提供することにより、施設の利用者である高齢者の皆様と一緒に音楽を楽しみ「若返ってもらうこと」です。同じ施設で複数回の音楽イベントを行うことで、高齢者の皆様の「認知症の進行を遅らせること」を最大の目標にしています。また、ラジオを活用して、私たちの音楽イベントの活動内容を社会に発信し、超高齢化社会での福祉施設・音楽環境の現状を伝えています。さらに、終了後も高齢者の皆様に「音楽に触れる機会を提供できる環境」を整えることが最終目標と考えています。</p>		



テーマ	全学共通教養教育科目「プロジェクト科目」成果報告 【京都の伝統織物をつなぐ～織物文化ビジネスプロジェクト～】			
学校名	同志社大学			
発表代表者	平田 有喜宏			
連名発表者	足立 尚紀	小林 真里那	山本 和泉	
キーワード	Project-Based Learning		社会連携	
	教養教育科目		多様な指導・支援体制	
発表の概要	<p>同志社大学では、2006年度より全学共通教養教育科目「プロジェクト科目」を設置している。本科目は全学部全学年対象のPBLに基づく正課科目として年間20クラス250名程度が履修している。</p> <p>今回は2014年度開講クラスのうち最終成果報告会で総合評価の高かった【京都の伝統織物をつなぐ～織物文化ビジネスプロジェクト～】について履修生が報告する。</p> <p>本プロジェクトは、衰退しつつある京都の伝統織物の現状や原因を把握し、ビジネスの観点から、伝統織物の活性化を目指すプロジェクトです。春学期は、伝統織物を製作している工房への取材を行い、織物に対する知識と理解を深めた。秋学期は、その学びから得た知識を基に話し合い、活性化のための解決案を練った。活動の集大成として、12月に「織物ミュージアム」と「工房見学ツアー」を開催した。これにより、多くの来場者に織物の魅力を伝えられたと実感する反面、伝統織物が抱える課題に取り組むことの難しさを知った。</p>			



テーマ	学びのモチベーションを継続させる入学前教育		
学校名	佛教大学		
発表代表者	岡崎 祐司		
連名発表者	吉川 奈見	平井 孝典	
キーワード	入学前教育		高大接続
	<p>発表の概要</p> <p>AO 選抜や特別推薦入試で早期に入学が決定した生徒に対する入学前教育の取り組みは、周知の通り全国的に拡大しています。</p> <p>佛教大学でも、2003 年度より入学前教育を開始し、その当初は、学習習慣の継続や基礎学力の定着に着目し、添削課題を課して対応してきました。</p> <p>しかし、2011 年度からは「学力補完は入学後の取り組みとし、学びへのモチベーションを高めおくことの方が、4 年間の大学生活で重要ではないか」との視点に立ち、学科の教員や先輩との交流や学びへの動機づけを意識したプログラムへと大幅に変更しました。</p> <p>毎年、参加者のアンケートからは、「入学が楽しみになった」「大学で何を学ぶのがよくわかった」など満足度の高い感想が多く寄せられています。</p> <p>今回のセッションでは、本学の取り組みをご紹介するとともに、他大学の方々と入学前教育について意見交換を行い、相互に有益な時間としたいと考えています。</p>		

『学びのモチベーションを継続させる入学前教育』

＜リメディアルか？学びへの動機づけか？＞ ＜佛教大学が考える学修ピラミッド＞

本学も2003年度入学より入学前教育を実施。大学教育の基礎と学力向上を目的に、入学前から様々な課題を課し、リメディアル系単科大学とは異なる動機づけをシフト。

内容	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
リメディアル	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
レポート作成	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
動機づけ	△	△	△	△	△	△	△	△	△

※「リメディアル」系単科大学とは異なる動機づけをシフト。2003年度より入学前教育を開始し、その当初は、学習習慣の継続や基礎学力の定着に着目し、添削課題を課して対応してきました。しかし、2011年度からは「学力補完は入学後の取り組みとし、学びへのモチベーションを高めおくことの方が、4年間の大学生活で重要ではないか」との視点に立ち、学科の教員や先輩との交流や学びへの動機づけを意識したプログラムへと大幅に変更しました。

⇒本学の実態保とも整合性がある。

このピラミッドがしっかりしていると、
低単位・低学・低学・・・

＜学びのモチベーションが継続するプログラム＞

9月-11月 12月 1月 2月 3月

E-Learning
ワークシート
オンライン
キャンパスライフ

入学手続き
入学前教育(E-learning)システムを稼働し、定期的な情報提供、入学への準備感を高める！
自らでレポートを作成、学びへの動機づけを高める。
教員・学生がゴールとなり、入学前教育の
疑問や不安を解消、学びの動機づけを高める。

＜入学前教育のコアとなるエンジョイ！キャンパスライフ！（大学体験）＞

★入学前の学生の心理状態★

学習への不安
「ついていけるかな？」
「進級が取れるかな？」

就職への不安
「何を学ぼう？」
「何を学ぼう？」

学生生活への不安
「友達づくり」
「キャンパスライフ」
「キャンパスライフ」

教員、職員、学生が協力しあえば、不安や疑問を解消できる。自分自身で学ぶだけでなく、大学教育に積極的に参加することで、入学前の準備を整えつつも、不安や疑問に打ち勝てる。

佛教大学



テーマ	草の根のFD ～学部との対話を重視した新たなFD～		
学校名	佛教大学		
発表代表者	岡崎 祐司		
連名発表者	吉川 奈見	平井 孝典	
キーワード	FD		学部との連携
発表の概要	<p>みなさんの大学では、学部とFDセンター（FD担当部局）は円滑にコミュニケーションが取れているでしょうか？また、学生だけでなく教員の声も汲みながらFDをすすめているでしょうか。</p> <p>佛教大学では、2015年度より新たな取り組みとして「学部との意見交換会（ヒアリング）」を年に2回開催しています。</p> <p>十分に時間を取り雑談を交えた対話の中からは、日頃、教育活動でお困りのことや学生の気質の変化、教室施設の問題まで、様々な意見が聞こえてきます。</p> <p>また、各学部内で自主的に行われているFD研修や教員間の協働など、今まで知り得なかった様々なFD活動まで知ることができました。</p> <p>今回のセッションでは、FDにおける学部との対話の重要性やそのメリットをご紹介しながら、「学部との意見交換会（ヒアリング）」で得た情報をFD研修会や入学前教育に活用した取り組みについても発表したいと思います。</p>		

『草の根のFD ～学部との対話を重視した新たなFD～』

<FD部門の悩み……>

学内で円滑にしている中で、教員や学部の意見が得られない事や、FD研究会を開催しても参加者が極めて少ないことはよくある事ではないでしょうか。佛教大学でも、学内で授業アンケート、入学前教育、FD研究会などのFDを進めてきましたが、十数年間、大学（事務局）側が目指すFDと先生方との間にズレを感じている事は事実です。

<大学を取り巻く三者の現状>

学生
 教育活動中での対話
 研究活動中での対話
 学生支援中での対話
 学生指導中での対話
 教員
 大学（事務局）

今まで、フラットでよくばらんに対話できる場がなかった。

<学部との対話にチャレンジ>

ヒアリング開始時は非常に重なり形式的な質問紙、質問に深い雰囲気となり、色んな現状を聞かせてもらった。
 そのお陰は、日々の事務や会議からは知り得ないリアルな意見が寄せられた。

- ・大人教員側の運営が難しいワークス環境
- ・発達障がい学生への対応
- ・初年次教育をフレッシュマンキャンプにしたい
- ・グループワークを取り入れたいが効果的な運営ができない
- ・実習先での問題、その学生対応
- ・授業アンケートのありがた
- ・今まで見えなかった学部単位のFD
- ・教室の静寂性を保つ方法がわからない
- ・カリキュラム改革に対する感傷的の相違
- ・（仏教学科）宗門後継者のドロップアウト問題
- ・ゼミ学生に、キャリア教育ができず困っている

学部や教員の希望（要約）にそえない理由も、ゆっくりに、練り込まれる場であった事も大きな成果。

<学部ヒアリングの活用例>

大人教員側の運営が難しい	→	2014年度FD研究会の実施
発達障がい学生への対応	→	2014年度FD研究会の実施
各学科内での小さなFD活動	→	情報と連携、今後、発表等を検討
ドロップアウトの問題	→	初年次教育の強化
ゼミ学生のキャリア指導ができない	→	キャリア部門へ報告・検討

<学部ヒアリングの成果>

- 2014年度のFD研究会は、昨年度に比べ数十倍の参加者数！！
- 今まで見えなかった、学部内の小さなFDを知ることができる。
- 草の根的なヒアリングが、先生方が抱えている課題が見えてくる。
- 教員との距離が縮まれば、教職協働のFDが可能になる。

佛教大学



テーマ	立命館大学におけるピア・サポート活動促進の取り組み(2) —団体同士が連携するためのピア・サポート・マップの作成—			
学校名	立命館大学			
発表代表者	川那部 隆司			
連名発表者	岡本 詠里子	沖 裕貴	土岐 智賀子	
キーワード	ピア・サポート		主体的な学び	
	学生団体の連携		包括的学生支援	
発表の概要	<p>大学教育におけるピア・サポートの重要性は、既にさまざまな報告がなされている。サポートを受ける学生はもとより、サポートを提供する学生にとっても大きな成長を遂げる機会となるピア・サポートは、大学において学生の主体的な学びを実現する上で、十分な効果を発揮すると考えられる。長いピア・サポートの歴史のある立命館大学では、現在 20 以上のピア・サポート団体が存在し、のべ 3,000 名以上の学生が多岐にわたるピア・サポート活動に従事している。昨年度の FD フォーラムでは、より質の高い、包括的なピア・サポート活動が行われることを目指して、ピア・サポート団体同士の連携の可能性を、学生たち自身が議論し考えていく様子とそこから見えてきた課題を報告した。今年度の Assembly for Peer Supporters 2014 (APS 2014) では、昨年度の到達点と課題を踏まえ、ピア・サポート団体同士が連携する上で有用な「ピア・サポート・マップ」を作成し、それを参照しながらより具体的な連携の在り方を検討した。本発表では、APS 2014 の取り組みや完成した「ピア・サポート・マップ」、ピア・サポート団体の紹介冊子等を紹介し、今後の課題と展望について検討する。</p>			

立命館大学におけるピア・サポート活動促進の取り組み(2)
—団体同士が連携するためのピア・サポート・マップの作成—
川那部隆司・岡本詠里子・沖裕貴・土岐智賀子(立命館大学)

立命館大学におけるピア・サポート

20以上のピア・サポートPS団体
3,000名以上のピア・サポーター

Assembly for Peer Supporters 2014

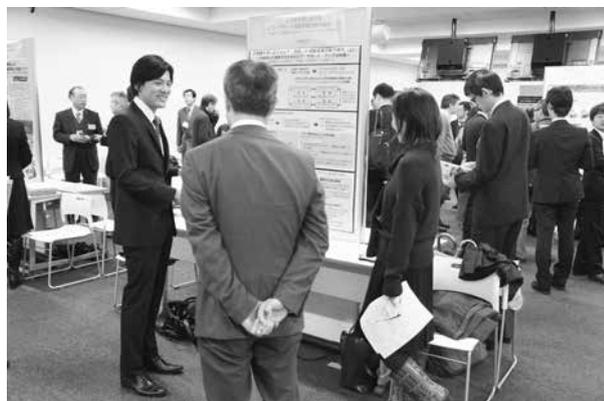
APS2013の意義
・現状の連携不足の再認識
・連携の必要性への気づき
・連携のきっかけ

APS2014の目標
・APS2013で生まれた「連携のきっかけ」の具体化
・連携を具体化するには？
① 連携のための道具を作成
② APS団体をより学生中心の取り組みにする

(1) 連携のための道具作り
ピア・サポート・マップ
ピア・サポート・プロフィール

(2) 学生を中心とした取り組み
学生FDスタッフ

APS2014の成果と今後の展望
1. マップ、プロフィールの作成
2. 学内外に向けた発信
3. 自主勉強会



テーマ	龍谷大学ラーニングコモンズ開設		
学校名	龍谷大学		
発表代表者	井上 弓子		
連名発表者	腰山 千明		
キーワード	ラーニングコモンズ		学修支援
	主体的な学び		
発表の概要	<p>龍谷大学では、学生の多様な学びの空間として、深草学舎及び瀬田学舎に機能別の「スチューデントコモンズ」「グローバルコモンズ」「ナレッジコモンズ」からなる「龍谷大学ラーニングコモンズ」を設置します（深草学舎 2015 年 4 月以降、瀬田学舎 2015 年 9 月以降）。</p> <p>各コモンズでは、それぞれの機能に応じた学修支援体制を整備し、学生の主体的な学びを支援します。第 20 回 FD フォーラムでは、各コモンズの機能等について紹介します。</p>		

多様な学びの空間
龍谷大学ラーニングコモンズ

Ryukoku Learning Commons

【深草学舎】2015 年 4 月～
【瀬田学舎】2015 年 9 月～

深草コモンズについてご紹介します

学生の多様な学びの空間として、深草学舎及び瀬田学舎に機能別の「スチューデントコモンズ」「グローバルコモンズ」「ナレッジコモンズ」からなる「龍谷大学ラーニングコモンズ」を設置します。

各コモンズでは、それぞれの機能に応じた学修支援体制を整備し、学生の主体的な学びを支援します。

スチューデントコモンズ
～学生による「学び」の創造と交流の空間～

様々な知的活動を可視化し、学生の主体的な学びを実現する拠点として展開する。

導入学級のほか、自習の場を自由に組み合わせて、可視化された学びを共有することで、他教員によるブレインストーミングが可能。また、今秋の授業で実施された授業、自習の場を可視化し、その場での学修支援を提供するスペース。

学生団体のミーティングや学生相談、学生同士や学内外の教職員が自由に交流する空間。ウェブメディアが利用可能。可視化された学びを共有するスペース。

プロダクティブスペース
グループワーク、発表練習などを行い、各専攻主体や学生主体が活躍するグループワークや発表練習の場を提供するスペース。

デジタル動画編集や録音ができる空間

作成したデータや必要な情報を印刷できる空間

本学の歴史や最新情報について、パネル・ポスター等を用いて展示・広報する展示・広報空間

配置図【深草学舎 和断館 1F(西側)】

グローバルコモンズ
～マルチカルチャー、マルチリンガルな雰囲気を満たした学びの空間～

国際化を推進する空間であり、学生が多言語・異文化理解を学び実践する拠点として展開する。

留学生や日本人学生等が気軽に、自由に交流する空間。くつろぎながらグローバルな雰囲気を感じられる。

様々な国の学生と交流する場や、自習の場、留学支援センターやアドバイザーが常駐している。留学相談や留学準備のイベントの開催も予定。

個人のレベル・ニーズに応じた様々な学修支援や、留学志望者向けに学修支援を提供する。留学支援センターやアドバイザーが常駐している。留学相談や留学準備のイベントの開催も予定。

英語やディスカッションなど授業形式での語学学習・異文化理解等を実施できる空間。

配置図【深草学舎 和断館 1F(東側)】

ナレッジコモンズ
～学生が主体的に学ぶ空間、学びのリエンジョー空間～

学生が図書館の有する学術情報や機能を活用し、主体的かつ協力的な学びを実現する拠点として展開する。

図書館の多様な学術情報や機能を活用し、学生同士で自由に学び合うスペース。静かに個人学習や読書、入試対策スペース、読書イベント、読書会や読書会を開催するスペース。読書イベントや読書会を開催するスペース。

文章作成、データベース検索、検索資料を閲覧する目的に合わせて利用できるコーナー

自由に動いながらグループ学習、ディスカッション、発表などを行う場。最新のタブレットやデジタルカメラ、資料・ノートPCを共用するスペース。読書資料の活用や検索が利用できるスペース。

配置図【深草学舎 和断館 B1F】

